⑨　永　本　　幸　氏　（択捉島元島民）

私は北方領土で一番大きい択捉島に生まれました。

当時のソビエトに強制送還される 18 歳まで択捉島に住んでいました。

択捉島は知床半島の北東にあり、面積は鳥取県とほぼ同じ大きさです。

択捉島には千島火山帯が通っており、1,600m前後の山々が連なっています。麓にはトドマツ、白樺などの原生林がうっそうと茂っております。

島での主な産業ですが、オホーツク海側は、サケ・マス漁が盛んで、孵化事業も数か所で行われていました。夏から秋にかけては、北海道や東北地方から多くの出稼ぎの方が来て、島はにぎわっていました。

私が住んでいた太平洋側では、海藻の採取が盛んで、春からフノリ、ギンナンソウ、海苔など、潮が一番引く６、７月には学校も休みになるくらい、たくさん採れました。９月からは昆布漁が始まり 11 月中旬まで続きます。すべて一家総出で作業をしていました。海岸近くではウニ、カニ、アブラコ、タコ、カジカがたくさん釣れました。マスなどは刺し網で捕っていました。冬が近くなると、ハタハタがたくさん捕れ、深い海では、タラ、タラバガニ、オヒョウなどがたくさん捕れました。

６月ころからは、草原にはアヤメが咲き、辺り一面オレンジ色になります。また、クロユリ、スカリユリ、ハマナスが咲き乱れ、岬の大地はサクラソウで一面がピンク色になるくらいでした。裏山では、エゾヤマサクラが咲き、毎年見ても飽きない景色の良さでした。

海苔などの海藻は、潮が引く１週間くらいしか採ることができません。乾燥させて製品に仕上げてからは、島の人々に畑作業が待っています。ウグイスの声を聞きながら畑仕事を行います。芋畑は一番広く、キャベツ、ダイコン、ニンジン、白菜など、どこの家でも作っていました。肥料は袋詰めの物も使いましたが、海が時化たときに浜辺にうちあげられ、雨や暑さで腐った昆布などを馬やモッコなどで運んできて使いました。芋は大きくなり、野菜もおいしく育ち、たくさん収穫できました。

島にはクマ、ウサギ、キツネなどがいました。キツネは飼っていたものが逃げて野生化したも

のらしく、数は少なかったようです。ウサギは夏はグレーに、冬は白くなります。何と言っても数が多かったのはクマでした。しかし、村の近くには決して近寄って来ませんでした。ある年の８月、根室から来た金魚売りの人が、山道でクマを見かけて、びっくりして天秤棒をかついでいた桶の金魚を放り投げ、夢中で逃げてきたそうです。

島での交通は、歩くことと馬でした。冬は歩きと馬、馬そり、スキー、かんじきでした。馬は島で暮らす人たちにとって、なくてはならない交通手段でした。その家庭にもよりますが、２頭から５頭くらい持っていたと思います。ほとんどが放牧で、必要なときだけ村の小高い丘の囲いのところに追い込み、自分の馬に綱を掛けて連れ帰り、残った馬は再び山へ帰しました。馬はドサンコといって、背はあまり高くなく、おとなしく乗りやすい馬でした。山道を行くときは、馬の首に大きな熊よけの鈴を付けて走りました。

燃料は、山に木が豊富にあったので、薪でした。冬には、山奥からの薪の運搬に馬そりを使いました。このように馬は大事であり、家族の一員として可愛がっていました。

吹雪が続くと、山から年長の馬が先頭になって下りてきて、玄関先で前足で地面を叩いて、干し草やニンジンを催促することも度々ありました。

北海道への往復ですが、流氷がなくなる４月から 12 月までの間は、函館や根室からの海産物を扱う問屋の定期船が月２回くらい来ていたので、味噌、醤油、砂糖、ワラジ、カゴなど、すべての生活用品を積んできます。帰りは海産物の製品を積んで帰ります。海藻は滑るので、海藻採りの人たちには、ワラジは大事な物でした。今思うと物々交換ではなかったかと思います。

12 月の最終便には、お正月用のミカン、餅米、お菓子、黒砂糖などが積まれています。大きな艀が本船との間を何度も往復して浜に陸上げし、村人がそれぞれの家まで運びます。

その後、４月の海明けまでは通信物、新聞、雑誌などの物は、何一つ届きません。ラジオだけが唯一の情報源でした。オホーツク海側の紗那（しゃな）には、根室の落石の無線局から無線通信が入るので、電報だけは届けられました。

村人はみんな勤勉で、助け合って暮らしていました。

映画は、小学校の屋内運動場が映画館に変わり、座布団を持参して見たものでした。

冬は百人一首、カルタ大会、剣道大会、弁論大会、お芝居など青年団が村人に見せ、楽しませてくれました。

娯楽の少ない時代でしたので、小学校の運動会は村人の運動会でもありました。盆踊りも空き地で、櫓太鼓を中心にして、夜遅くまで楽しんでいたようでした。

明かりは灯油のランプでした。火屋の部分の掃除は、小さな手が入る子供たちの仕事でした。

暖房は薪ストーブで、食事の支度からお風呂まで薪でした。１月から４月末の雪どけまで、村じゅうが薪作りの作業に明け暮れていました。

山奥で、営林署から払い下げを受けた白樺の木の伐採が男の人たちの手で行われました。ノコギリで 60 ㎝くらいの長さの丸太になり、手ぞりで急な坂道を下ろし、平らなところに運びます。この作業に、私も姉と馬そりに乗って、７㎞くらい山奥まで手伝いに行ったことが、一度だけありました。登るときは押して、下りはそりの後ろのロープを付けて引っ張りました。とても大変な仕事だったので、今でも忘れられません。家の前まで馬そりで運び、その丸太を割って薪にして使っていました。３月にお彼岸の団子を食べながらの作業も思い出の一つです。

薪作り作業を行う空き地は、春から秋までは海藻などの干し場になるので、綺麗にしておく必要があります。薪の山を何列かに積み上げて、整然とした薪の塀になったときには、雪もほとん

ど消えます。４月の海が穏やかな日は、待ちに待った春一番の定期船が来る日です。村じゅうで船が来るのを待ちました。郵便物は冬の間、根室の郵便局に留め置かれていため、どっさり届きました。毎年このような生活の繰り返しだったような気がします。

1945 年（昭和 20 年）８月 15 日、終戦になりました。終戦から２週間くらい経った８月末に、北の方からソ連兵が上陸してきたとの知らせがありました。私は、そのとき陸軍の師団本部のあった天寧（てんねい）という集落の郵便局にいました。終戦と同時に通信も途絶え、郵便局の業務もストップしていました。すぐにソ連兵による日本軍の武装解除が始まったのでした。その様子を、恐い物見たさに郵便局の２階のカーテンの隙間から見ていたところ、山の奥の師団本部の方から、たくさんの日本兵が３列に並んで、日本海軍の滑走路の方へ行く姿が見えました。後から後からと続いて、銃を肩に掛け整然と歩き、とても立派に見えました。初めて見たソ連兵は、薄汚れたマントを着て、銃を肩から下げ、日本軍の脇を歩いていました。あの大勢の日本兵はソ連の貨物船に乗せられ、シベリアへ連れて行かされたようです。戦争が終わってからソビエトに不法占拠された北方領土の地にいたというだけで、大勢の日本の軍人が流刑の地といわれたシベリアになぜ連れていかれたのか、また、許されることではないと今でも強く思っています。

そのようなことがあった２日後、私は母の元に帰りました。私の村でもソ連兵を見かけるようになりました。

ある日、突然ソ連兵が私の家に来ました。長い革靴のまま家に上がって来ました。私の家族は、前年に父を急病で亡くし、母と兄と姉と私の４人暮らしでした。家には姉のために用意していた着物や洋服がたくさんありましたが、拳銃を兄に突きつけ、身振り手振りで兄に指示をして、トランクの蓋が出来ないくらい着物を詰めさせていました。私はそれを見て怒りを押さえ切れず、「そんなことをしてもいいのですか」と強い口調で言いました。そうしたら、ソ連兵は拳銃を私の方へ向けました。そのときは不正に対する怒りの気持ちの方が強く、撃たれる恐さは全く感じませんでした。当時、小学校の先生をしていた兄がソ連兵をなだめてくれたので、私は撃たれずに済みました。２年間の抑留生活で恐かったのは、この一度だけです。

翌年８月、マス漁の最盛期になると元の郵便局長が保護者兼監督者となって、村から 20 ㎞くらい離れたオホーツク海側のマス漁場に行きました。そこには１ｍくらいの浅い海中に作られた

作業台があって、朝から夜中までマスの内臓処理などの作業をさせられました。工場は 50mくらいの大きさで、いくつも並んでおり、ロシア人がマスを洗ったり、塩漬けしたり、イクラを作っていたようでした。船や工場は、日本の業者の所有だったものをロシア人がそっくり使っていました。私は筋子を作り、みんなで食べようと思い、軍手にこっそり筋子を隠し持って帰りました。宿舎に着いてからその筋子を洗い、塩の入っている樽に入れ、翌朝、アルミの弁当箱にきっちり入れておくと、次の日にはとてもおいしい筋子ができます。何度かやりましたが、不思議と悪いことをしたという思いはありませんでした。せめてものしっぺ返しという心境だったと思います。マス漁が終わると、私たちは家に戻りました。

1947 年（昭和 22 年）9月、強制送還の命令が下りました。リュックとわずかな物を持って、オホーツク海側から真っ黒い船体の貨物船に乗せられ、真っ暗な海を一晩航行し、降ろされたところが樺太（サハリン）の真岡（まおか）でした。日本の女学校跡という収容所に一週間入れられ、また乗船の命令がありました。今度はいよいよシベリアに連れて行かれるのではないかと不安で、力なく船のタラップを上がって行きました。そのとき「お帰りなさい」と日本語の声がしたので、びっくりして顔を上げると、船の上では白い制服の日本人が出迎えてくれました。「日本の船だ。」とだれかが叫び、安心とうれしさで、その場に座り込んで泣き出した人もいました。今でも忘れることは出来ません。

その引き揚げ船は、韓国の釜山と下関との間の連絡船で、白い大きな船体です。船酔いもなく函館港に入り、検疫を受け、ようやく日本の地へ上陸することができました。1947 年（昭和 22 年）10 月４日のことだった思います。今から 65 年前のことでした。

不法に占拠されている北方領土は、大切な日本の領土です。皆さんもこのこと忘れないで北方領土返還要求運動に関心を持ち続けていただくよう、心からお願いいたします。

＜訪問校＞

・網走市立白鳥台小学校（平成２４年１１月１４日（火））